好きになったということ

Shiena

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きになったということ

【Ｎコード】
Ｎ７９６３Ａ

【作者名】
Ｓｈｉｅｎａ

【あらすじ】
まったく自慢じゃないけれど、これまで私は人並みに男の子と付き合ってきた。でも今回ばかりは、何かがおかしい。何かが今までと違う。これが、本当に人を好きになったということ？

#いち#

彼との出会いは中学2年生になりたての頃。

たしか、5月だったと思う。

本当に偶然が偶然を呼んで、私たちは出会った。

『出会った』と言っても、直接会ったことはない。

彼は私の顔を写真で見て知っているけれど、私のほうは彼の顔さえ知らない。

彼は写真を送ってくれないから。でもそれは仕方がない。

この話は、少しくすぐったくてもどかしい話になりそうです。

#いち#（後書き）

まだ始まったばかりで完結するのか不安ですが、
目に留まったら、これからもちょっと読んでみてくれませんか？それでは。

#に#

寒くて、それでいて少し暖かな5月。

玄関のインターフォンが鳴る。

「あ、いらっしゃい。荷物、あっちね」

いとこたち家族が我が家に到着した。

おじさんとおばさん、まだ3年生の大樹くん、それから私と同い年の和樹。

ここは男ばかりの家族だ。おばさんは毎回大変そう。

「和樹、ちょっと手伝ったら？」

私がこの言葉を言おうものなら私の背より２０ｃｍ以上高いとこをから軽くこぶしが飛んでくる。

「痛い」

「まぁね」

あいつはそれだけ言うと、お兄ちゃんのほうに歩いて行った。

そしてふたりでテニスのことを熱心に話している。

ったく、テニスばか。

「あ、ねぇ今日みんな泊まり？」

私が誰にともなく言うと最初に和樹が、

「俺、お前の兄貴の部屋。」

「僕ママと寝る」

と大樹。

「じゃぁいつもどうり和室貸してもらえますか？」

と幸子おばさん。

お母さんがひとまとめに「みんないつものところに落ち着けばいいじゃない？」

と言ったから、みんなそれぞれの部屋に散っていった。

「つまんない」

私はぽつりとつぶやいて2階にある自分の部屋に向かった。

この部屋はなんだか落ち着く。少し前までお父さんの部屋で、とんでもなく煙草臭かったけれど・・・・

ハウスクリーニングの人たちって、すごい。

ベッドに寝転がって天井の壁の一点を見ていた。

穴あいちゃいそう。

そんなことを考えていたら部屋のドアが開いた。

私は寝そべったまま「誰？」とつぶやくように言った。

「俺」

「なんだ、和樹。　何？」

「お前彼氏は？」

「いない。」

「俺はいつでもいいんだよ」

「聞いてないけど・・・・」

「まぁすねんなって。ひとりアドレス教えてやるから」

「・・・・別に、いらない」

手に握っていたケータイが震える。

「・・・・いらないって言ったじゃん」

「俺じゃねーよ」

あいつはそれだけ言うと部屋から出てった。

何、あいつ・・・・

ケータイの受信Ｂｏｘを見ると知らないアドレスからメールが届いていた。

【こんにちはぁ～　俺和樹の友だちの明浩。
よろしくね。】

しょうがないか。

【あ、うん。始めまして。よろしくね】

この人のアドレスを知ったのも、偶然なんだ　って思う。

#に#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

#さん#

その日の夜、やっぱり私は部屋でぼうっとしていた。

明日も開校記念日かなんかで休みだから、だるい身体が余計に重い。

だってきっといつもと同じ毎日だから。

そんなことを思ってるとまたケータイが震えた。

「明浩くんから・・・・」

【こんばんは〜】

【こんばんは】

私はそれだけ打ち返すとケータイを枕の下に押し込んだ。

1分と経たないうちにまたケータイが震える。

【ってか、今度会えない？】

え・・・・

【え？】

【ごめん、嫌だったらいいんだけど】

私は少し考えて

【たぶん、平気だと思う。でも来週からいろいろ忙しいから、明日の午前・・・・かな】

という内容を送った。

【わかった。じゃぁ1時くらいに迎えに行く。住所は?】

【っていうかコンビニの近く】

【いや、わかんねぇよ。俺そこらへん住んでないから】

あそっか・・・・

【じゃぁ、○○駅で待ち合わせで】

【わかった。それじゃ明日】

【うん、ばいばい】

やりとりが終わってすぐ、私は眠った。

変な夢を見て夜中に起きてしまったけど、きつく目を閉じたら眠っていた。

次の日の朝は空が眩しい晴天だった。

そして私は例の駅で明浩くんを待っている。

もう１０分遅れてる。

「あの人、時間にルーズなのかな」

独り言を言っていると、後ろから「しおりちゃん？」と声をかけられた。

振り向くと明浩くんらしき人。

「あの、明浩くん・・・・だったりして？」

「うん。始めまして～」

「どうも」

会話が終わってしまった。

少し間があって、先に話し出したのは明浩くんのほうから。

「えっと、どうする？」

私は計画性のない人が好きじゃないから、少し声のトーンを落として

「どこでも。明浩くん、行きたいところは？」

私たち、別に付き合っているわけじゃないのにこんな言葉、まるでまだ付き合いたての

頃のカップルの会話にそっくりじゃない。

「あぁ、俺あと少ししたらテニス行かなきゃなんないからさ。1時間くらいしか遊べないわ」

遊ぶ、ねぇ。

「うん、大丈夫。とりあえず、あっちらへん行こう？にぎやかみたいだし」

「うん」

それから私たちはどこの店に入るわけでもなく、ただふらふらと商店街を歩いた。

つまんないな・・・・ひそかに心の中でつぶやいた。

そのうち長い1時間が経った。

「そんじゃぁ、今日は会えてよかった」

「あ、うん。ありがと」

「じゃぁ行くわ。またね」

「うん、気をつけて」

そして私たちは別々のホームへ降りていった。

私は歩きながらほっとしていた。「またね」か。たぶんもう直接会うことはないだろうな。

空をみると、まだ高いところにある太陽が、私の髪に黄色いカーテンを絡めていた。

#さん#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

#よん#

あれから何日か経った。

平日には普通に授業もあり、部活で部長をしている私としてはそれなりに忙しい日々だった。

そのこともあって、最近は誰ともメールをしていなかった。

もちろん明浩くんともメールしていない。

実のところ、私は明浩くんのことを気にもかけていなかった。

特別格好良かったわけでも、性格が良かったわけでも、気が利いていたわけでもなかった、

私たちが会ったあの日。

私は少し期待をしていた。

3ヶ月前に彼氏と別れて、まわりの友だちにはどんどん彼氏ができて、自分では焦っているつもりなんて

みじんもなかったのに、いつの間にか寂しさを覚えていたようだ。

だからと言って、私は男がいないと何もできないへろへろ女とは違う。

部活は充実している。

友だちからの信頼もそれなりにあつい。

でも何かが物足りない。

なんというか・・・・隣に誰かがいるって、すごく気持ちの良いことだから。

誰でもいい、ぎゅっと抱きしめられる快感が欲しかった。

誰でもいいとは言え、親に抱きしめてもらうのは小学校の低学年ですでに卒業している。

友だちとはよくじゃれながらきゃぁきゃぁやっているけれど、いつものことで特別感が無い。

となると”付き合っている人”という存在が少しだけ恋しくなってくる。

でもこれと言って好きな人がいるわけでもない。

探すつもりもない。

だってほら、恋って一生懸命探して頑張るものでもないでしょ？

本当に頑張るのって、きっと付き合いだして彼のことを考えるようになってからだと思うの。

それか、大好きな彼を振り向かせるときとか。

でも、とにかくまだ私はそんな段階にさえいない。

～～～～♪

ケータイの着メロが鳴り、メールが届いた。

【こんちはぁ～　何してる？】

明浩くんからだ。あの日会って以来初めてのメール。

【部活から帰ってきたところ】

【お疲れ様です！！】

【なんで敬語なの？】

【いや、なんとなくです、はい】

【変なの・・・・】

【ひどいですよ～　なんてね】

私は少しイライラしながら、

【ごめん、私今日疲れてるんだ。メール、切ってもいいかな？】

【あぁ～！！ちょっと待ってくださいよ。アドレス教えたい人がいるんだけど？】

また敬語に戻った・・・・

【ふぅん？】

【いらない？それなら別にいいよ～】

何それ。ちょっと嫌な感じ。引き止めたクセに。気になるじゃない。

【なにそれ？そう言われると気になる】

【○○○○．○○○○○○３９６@ｙａｈｏｏ・・・・・・・】

【これが今言ってた人のアドレス？】

【うん。男だよ】

【ふぅん。名前は？】

【町田　豊】

【わかった。ありがとう】

まだメールも送っていなかったけれど

これが私と彼の、初めての出会いだった。

#よん#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

#ご#

その日、私は本当に疲れていて、明浩君からのメールに返信すると
すぐに眠ってしまった。

次の朝はなんてことなく来た。
うるさい目覚しい時計をとめて、ベッドから起き上がる。
あぁ全部黒くてざわざわに見える。
たちくらみはいつものこと。
最近は起き上がると必ずこける。
ったく、なんでよ。
下に行って顔を洗い、お母さんの作った朝食をほおばる。
そして登校。
そして下校。
学校にいた時間がとても短く感じる。
あっという間って感じ。

なにしろもうすぐ中間テストがある。

今はみんなが授業の内容を頭に詰め込もうと必死なのだ。

もう、頭痛いったらない。

ましょうがないんだけど。

そんなどうでもいいことをあれこれ考えていると、家庭教師の先生が来た。

それから9時頃まで勉強をして、先生とばいばい。

お風呂に入ってさっさと寝ようと思った。

寝る前にケータイの受信Ｂｏｘをチェック。

「あ・・・・」

すっかり忘れてた。

昨日明浩君からもらったこのアドレス。

たぶん町田　豊って人の。

「メール、待ってるのかな。この人」

思いはじめるといやに気になった。

【初めまして、武井しおりです。明浩君から、アドレス聞きました】

それだけ打つとそのメールを送信した。

1分と経たないうちに返信が返ってきて

【初めまして。俺、町田　豊】

【あ、うん。聞いた。なんて呼んでいい？】

【なんでも。友だちは普通に呼び捨てとか、ゆーとか呼んでるけど。】

【じゃぁ豊、がいいかな。私、しおりでいいから】

【そうなん？】

【うん。あんまりちゃん付けとか、いろいろ呼び名作られるの好きじゃないの】

【ふぅん。わかった、しおりね】

豊は確認でそう書いただけなのに、なぜだかどきっとした自分に恥ずかしさを覚えた。

【うん。あの、それじゃぁ明日朝練習で早いんだ。ごめんね、せっかくメールしてくれたのに】

【あぁ、俺も明日朝練だわ。じゃ、おやすみ】

【おやすみなさい】

ケータイを充電器に戻してベッドに入った。

でも、なかなか眠れなかった。

私はその夜を今でもちゃんと覚えている。

目の前の景色が少しずつ変わってきた、最初の日だったのだから。

#ご#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

#ろく#

ダメだ。

なんか変。

なんか違う。

すごく頭の中がもやもやする感じ。

困ったよ。

気になる。

気になる？

「うそ・・・・」

「は？何が？」

「え？何が？」

おっと、ここ学校なんだっけ。

「だから、今うそとか言ってなかった？」

「ん、言ってないよ。うん」

「そ？」

「うん、そう」

「そう。ふぅん、そっか」

「うん」

私、気になってるの？

家に帰ってケータイをチェックすると受信メールがふたつ。

一通はいとこから。

そしてもう一通は・・・・豊から。

【ただいまー　今何してる？】

豊からのメールはちょうどさっき届いたところだった。

【今学校から帰ってきたとこ。そっちは？】

しばらく経って

【俺は自分の部屋でしおりとメールしてる】

画面を見て少し微笑む。

【知ってる。私もだもん】

【なぁ、ちょい相談あるんだけど？】

【ふぅん？何？】

【俺今日彼女とケンカしたんだよ】

画面を見て今度は唖然。

「うそ・・・・」

思わず口から出た言葉。

「うそだよ」

もう一度それだけ言うと、そのままベッドに寝転がった。

１０分くらいそのまま目を閉じてじっとしていた。

それでもと

【そうなんだ。原因は？どっち？】

【彼女。浮気された。彼女は俺の誤解だって言ってるけど、実際見たんだよね】

【まじ。それは、なんて言うか・・・・豊と彼女さんとで話し合わないことにはさ、
きっと何にも進まないと思うから、とりあえず明日会ってよく話してみたら？
廊下とか、教室に会いに行ってもいいと思うし】

【彼女、3年で1歳年上。だから廊下とかで会わない】

年上・・・・

【そう、そっか。でもやっぱりどっかに呼んで話した方がいいと思うな】

【だよなぁ。困ったよ、まじで】

【そういうときのあるよ。頑張れ！】

【おう、わかってる】

【キレちゃ駄目なんだからね？】

【うん】

【じゃぁ今日はもう寝て。明日、またメールしてくれれば時間つくって返信するから】

【わかった。じゃあね】

【ん、おやすみ】

手助けをしてしまった自分が、やけに空っぽに感じるのだった。

#ろく#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

#なな#

次の朝、携帯に一通のメールが届いていた。

【やっぱり、彼女とは別れることにしたよ。
相談のってくれたのに、悪かったな】

目覚めの悪い私もびっくりし過ぎて眠気なんか吹っ飛んでしまった。

「うそ、別れちゃったんだ」

なんて言いつつ心の中でガッツポーズをして飛び上がっている

自分がいた。

【そっか。早く立ち直ってね。そんな女、忘れちゃえ】

送信ボタンを押す前にメール画面をみた。

自分っぽくないメールだったけど、気にせず送った。

するとすぐに返信がかえってきた。

【どうも】

「それだけかぁ・・・・」

思わず出た言葉。

何を書いて返信すればいいのかわからなかったから、
そのまま携帯を閉じた。

そういえば今日って日曜日。

本当に暇な日なんだよねぇ、私にとっては。

豊への返信をしないままでいると、また一通メールが届いた。

【俺今暇なんだけど、よかったら電話でもしない？】

「電話かぁ・・・・男の子と電話するのすごく久しぶりだぁ」

【いいけど、私豊の携番知らないよ？】

【０８０－×○×○－△□△□】

【ありがと】

でもなぁ・・・・

私からかけるの？？

【かけてくれる？】

こう聞かれたらかけるしかないじゃない。

【わかった】

なんてことないって思ってたのに、いざかけようとすると

声が震えそうになった。

「ふぅ」

ゆっくりと番号を押した。

耳の向こうで発信音が鳴る。

「もしもし」

「もしもし。あの、しおりですけど」

「うん、豊です」

ワンコールで出ないでよ・・・・

#なな#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

#はち#

何を話せばいいのかわからず、
とりあえず出た言葉が
「ワンコールで出たからびっくしたよ」
だった。
豊はしばらく何も言わず、まずいことを言ったなと後悔し始めたとき
受話器の中か豊の声が聞こえた。
「だって待ってたんだもん。そりゃワンコールで出るっしょ？」
なんかちょっとかわいくなって、
「ふぅん、待ってたんだ？
じゃぁもうちょっと時間経ってから電話すればよかったぁ」
なんて言ってみたりして。
「うわひでぇ。
悪かったよ。もう今度からワンコールで出ないから」
なんて言われるとちょっと寂しくて、
「うそ、うそ。ごめん？」

「冗談だしー」

とけらけら笑う声に安心した。

それから少し話して、

「じゃあ、また今度」

と言って電話を切った。

何を話したか、正直あんまり覚えていなかったけれど

こんなにほんわかとした気分になるのは、本当に久しぶりだった。

部屋でただぼーっとしていると、空は夕焼け色になり、

きれいだったから、お気に入りのポラロイドカメラに

撮っておいた。その写真は今でも大切に持っている。

年ごとにかわるスケジュール手帳の裏にいつもしまっておいた。

夜になってもなかなか寝つきの悪い私が、

今日に限っていつもより寝付けなかった。

なんとなくなのか、それとも電話したからなのか、
どっちでもよかったけどそんなことをずっと考えていた。

次の日は5時くらいに起きた。
あんまり寝てないはずなのに、頭がスッキリとする朝だった。
下におりても誰もいなかった。
自分の席に座って、なんとなくニュースをずっと見ていた。
そのうちみんなが起きてきたけど、ご飯を食べて
すぐ学校に行った。

普通の月曜日だったし、普通授業の日だったし、
普通に友だちとしゃべっただけだったけど、
家に帰れば、携帯にメールが届いてるかもしれない。
楽しみにしている自分が少し子供っぽく感じたけど、
それでも別にいいって言えるくらい、

私は恋をしていた。

#はち#（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7963a/

好きになったということ

2010年10月21日22時47分発行